

# 重要文化財 定光寺本堂の保存修理工事

主任研究員 古莊 貴也

## 1. はじめに

重要文化財定光寺本堂は、平成28年9月から平成29年8月31日にかけて、保存修理工事が行われた。当協会では、この保存修理において工事の設計・監理を行ったので、その概要について報告を行う。

## 2. 定光寺の概要

応夢山<sup>おうむ</sup>定光寺は、愛知県瀬戸市定光寺町に位置する（図1）。

建武3年(1336)に覚源<sup>かくげん</sup>禅師(平心<sup>へいしん</sup>書齋<sup>しよさい</sup>)によって開かれた。禅師が全国を行脚する中で尾張国水野に至り、炭焼窯跡に庵を結び、後の暦応元年(1338)に「無為<sup>むい</sup>」と名付けた建物を造営、地方領主の水野致國<sup>むねくに</sup>（中郷殿）などの援助を受けながら同4年(1341)に庫裏、方丈が建てられ七堂の地が定まった。この頃、仏殿を建設する地



図1 定光寺位置図（愛知県）

から「定光古仏」と称される仏像を一体掘り出す夢を3人の僧が同時に見たことから、禅師は山号を「応夢山」、寺号を「定光寺」とした。貞和4年(1348)には仏殿が建立され、禅師の出生時に母の霊夢に地蔵菩薩が現れた故事にちなみ、地蔵菩薩を本尊として安置した。このため、今日まで子授けの地蔵尊として人々の信仰を集めている。

開山当初は、臨済宗建長寺派であったが、慶安3年(1650)に尾張藩初代藩主徳川義直<sup>よしなお</sup>（諡<sup>おくりな</sup>は源敬公<sup>げんけいこう</sup>）が没してその廟を境内に築くにあたり、妙心寺派の智光<sup>ちこう</sup>禅師（喝堂<sup>かつどう</sup>全用<sup>ぜんよう</sup>）が本寺の住職として任ぜられ、以降歴代住職はその法脈を継いでいる。

## 3. 本堂（仏殿・無為殿）の概要

本堂は、方三間・入母屋造・こけら葺の主屋の周囲に裳階をとりつけた、一重裳階付の禅宗仏殿の形式としている。主柱、裳階柱ともに全て丸柱で、組物は禅宗様の三手先詰組を用いている。裳階には三斗組、双折棧唐戸、花頭窓、弓連子をいれている。内部は土間敷の一つの空間で、後方に来迎柱をたて、その前に禅宗様須弥壇及び宮殿を置いている。

来迎柱から前方の主柱にかけて大虹梁をかけ、その中央に大瓶束をたて、頭貫を通して二手先詰組をおいている。須弥壇上の1間四方には鏡天井を張るが、その周囲1間は放射状の扇垂木をみせ、主柱と裳階柱の間は海老虹梁で繋ぎ平行垂木をみせている。禅宗仏殿特有の上昇感の強い空間構成になっている。

建造年代については、暦応4年(1341)から寺の堂宇建立が本格化するなかで、貞和4年(1348)に仏殿が建立されたと『<sup>かくげん</sup>覚源<sup>ねんりやくふ</sup>禅師年略譜』に記されている。以降、永享7年(1435)、文明9年(1477)に焼失、明応2年(1493)に再建され永正7年(1510)に大地震で倒壊、その後再建されるが天文元年(1532)に炎上し、天文8年(1534)に再建工事の上棟式が行われ、その後も江戸期等に修復が加えられた。また、本堂の内部中央に安置される宮殿は、背面壁板の墨書から明応9年(1500)に竣工したことがわかる。

昭和14年(1939)の解体修理では、破損が進んで身舎の屋根部分が失われていたものを、鎌倉の円覚寺舍利殿など同形式の禅宗様仏殿に倣って、身舎斗栱以上を復原し、須弥壇及び中央厨子は後方に移設されていたものを旧位置に復した(図4、5)。

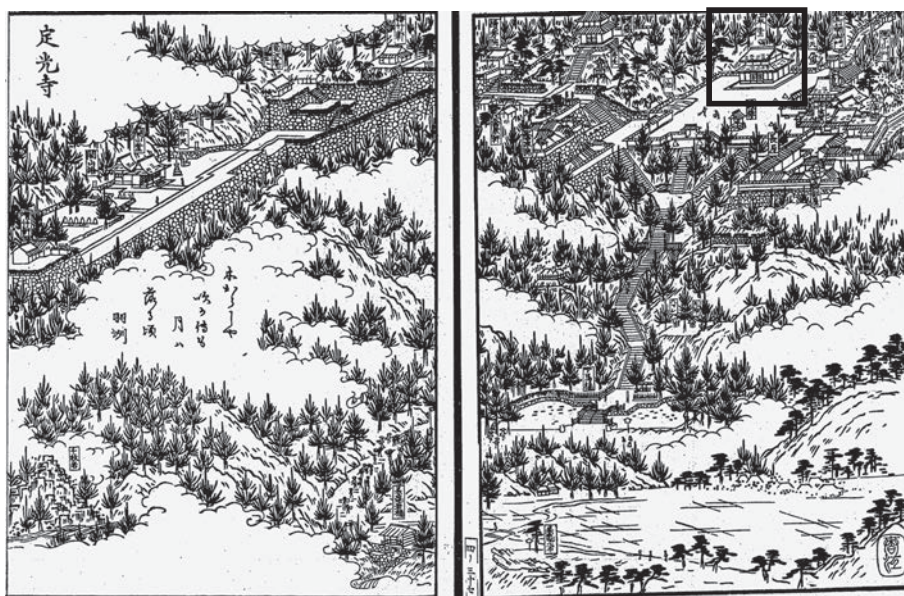
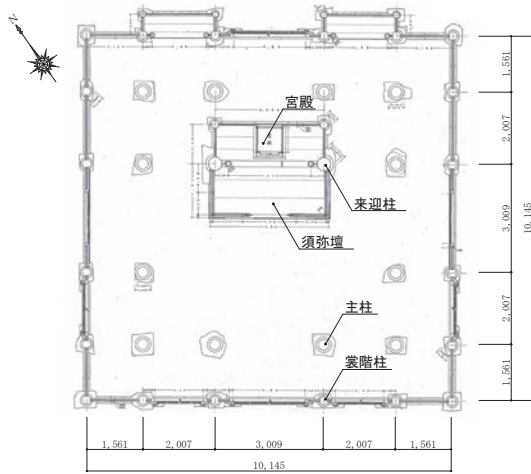


図2 定光寺境内図「尾張名所図会 後編」明治13年



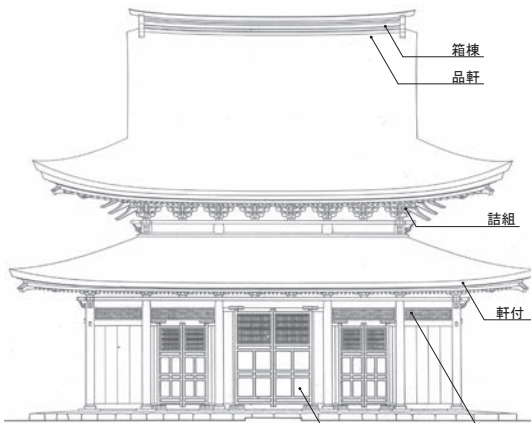
図3 同前 本堂拡大



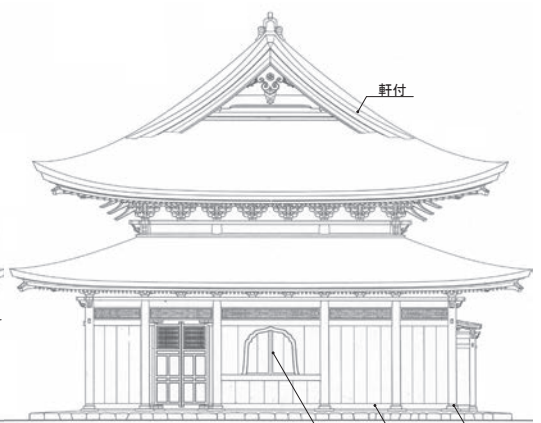
平面図



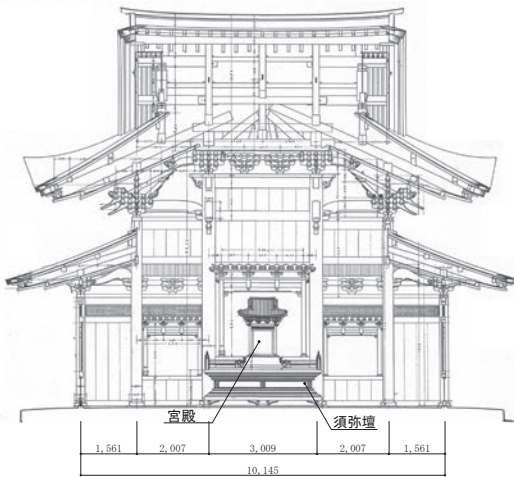
外観写真



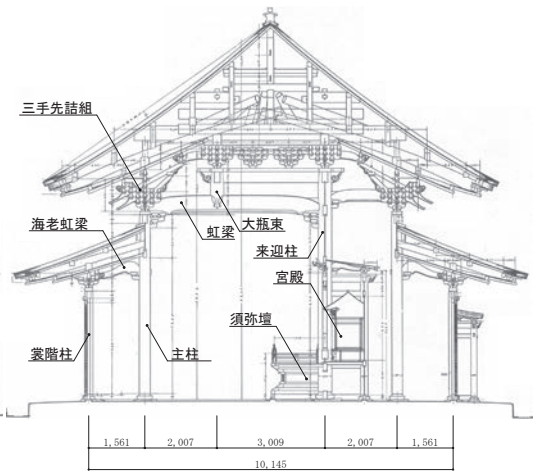
正面図(南面) 双折棧唐戸 弓連子



側面図(東面) 火頭窓 地覆 礎盤



桁行断面図



梁行断面図

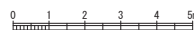
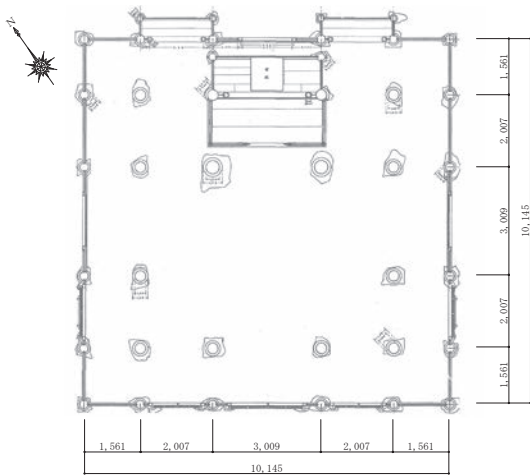


図4 本堂 平面図・外観写真・立面図・断面図



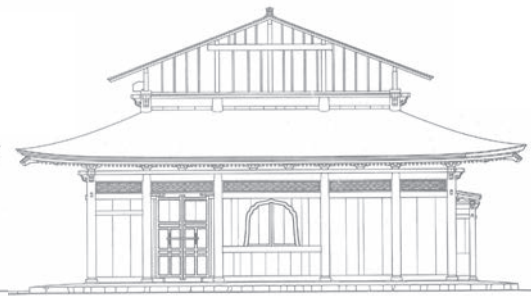
平面図



外観写真



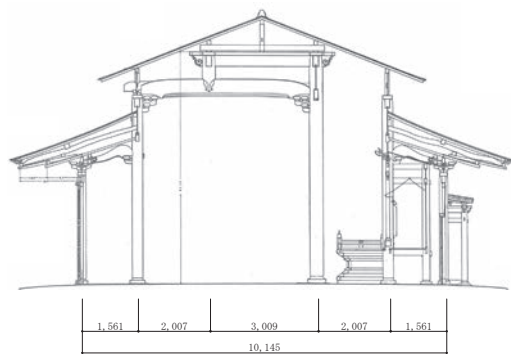
正面図(南面)



側面図(東面)



桁行断面図



梁行断面図

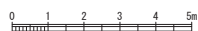


図5 本堂 平面図・外観写真・立面図・断面図(昭和14年修理工事前)

## 4. 構造形式

### ① 構造形式

桁行三間、梁間三間、一重裳階付、入母屋造、こけら葺

附 宮殿 一基

一間宮殿、入母屋造、本瓦形板葺

### ② 主要寸法

区 分	適 用	寸 法	
		(身 舎)	(裳 階)
桁 行	桁行両端柱間真々	7.025m	10.147m
梁 間	梁間両端柱間真々	7.025m	10.147m
軒 の 出	側柱真より茅負外下角まで	2.320m	1.727m
軒 高	柱礎石上端より茅負外下角まで	5.698m	3.247m
棟 高	柱礎石上端より棟頂上まで	10.881m	
平 面 積	側柱真内側面積	102.962m <sup>2</sup>	
軒 面 積	茅負外下角内側面積	136.072m <sup>2</sup>	135.636m <sup>2</sup>
屋根面積	平葺面積	213.190m <sup>2</sup>	166.381m <sup>2</sup>

## 5. 工事概要

定光寺本堂は大正15年(1926)に重要文化財に指定された。昭和14年(1939)に解体修理が実施され、その後昭和34年(1959)の伊勢湾台風で倒木等により被害を受け、昭和36年(1961)に屋根葺替修理を行った。平成5年(1993)にも屋根の経年劣化のため屋根葺替修理を行った。その後平成25年(2013)に部分葺替修理が行われたが、屋根全体に亘って葺板の劣化・摩耗が進み葺替の時期に達していたため、今回の修理に至った。



図6 身舎こけら葺破損状況



図7 裳階こけら葺、雨落ちより外のみ劣化

修理前のこけら葺の状況は、平葺は身舎・裳階とも全面的に葺板が劣化しており、腐朽により数箇所屋根面の陥没が発生し、背面部は黒変し、青カビが発生していた。特に隅背部分は著しい腐朽が生じていた。平成5年修理のこけら板は長さ450mm、厚4.5mm、幅90mmの樫材で、葺足30mmで葺き、葺込み銅板は入れられていなかった。葺板は通常より厚く、長い板を用いているのに係らず、平成5年の工事完了後約20年で屋根面の腐朽が始まったのは、葺込み銅板がなかったためと思われる。しかし解体調査の結果、野地板は健全で、軒付一部の腐朽に留まり、平成25年の応急処置が功を奏したといえる。

なお、裳階の身舎雨落位置より上方の平葺及び品軒は昭和36年、平成5年の葺替の際も葺替えておらず、昭和14年の解体修理時の平葺が残存している。修理前の状況でもこの部分は健全であったため、本工事でもこの部分を残した。既存こけら葺との取り合い部分は、既存部を持ち上げて下に新規こけら葺を葺き込んだ（図9）。

軒付は破風尻及び破損部のみ部分補修を行い、身舎の品軒は全て葺き直した。



図8 身舎屋根、平葺き施工状況



図9 裳階屋根、既存こけら葺との取合い

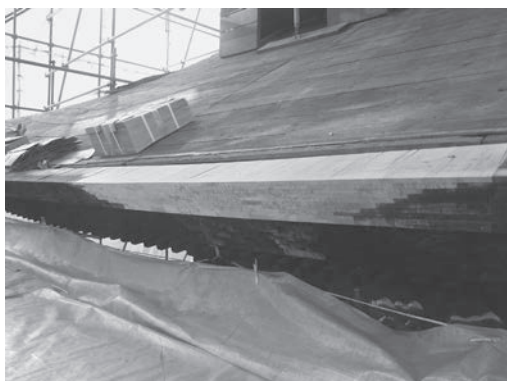


図10 身舎軒付、取替え完了



図11 箱棟補修完了

箱棟はあおり板の破損が見られたが、鬼板も含めて概ね健全であったので、部分補修と銅板の取替えを行った。また、こけら葺及び箱棟の修理に併せて、避雷針の取替えを行った。解体調査では、身舎・裳階の野地板に「昭和13年修補」の刻印や、鬼板背面に「平成5年7月修補」のマジック書きが確認できた。

木部では、背面礎盤<sup>そばん</sup>や地覆の一部に蟻害による破損が見られたので、矧ぎ木補修を行った。宮殿では鬼板の再取付け、丸瓦型棒木の一部復旧を行った（図13）。

## おわりに

本稿作成にあたり、定光寺及び工事関係者の皆様には大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。



図12 宮殿、修理前 丸瓦型棒木が一部欠損



図13 宮殿、修理後 降り棟鬼板、再取付け



図14 鬼板、銅板包み解体状況（表面）、背面に修理年記載



図15 施工完了、西面外観